教育出版

Educo エデュコ

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.70
2026年

巻頭インタビュー p.2
哲学者
小川 仁志さん

知っておきたい教育 NOW p.4
① みらい分校が目ざす令和時代の夜間中学の姿
②「らしさ」を育む教育課程と「信じて待つ」姿勢

きょういく見聞録 p.8
① 9年間で育む「自分を舵取りする力」
〜キャリア・パスポート（電子版）がつなぐ成長の軌跡〜
② 貧困と孤立の中で生きる
子ども・若者の居場所づくりを20年

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14
【連載第2回】
10代の読者に向けた本づくり
〜岩波ジュニア新書の取組〜

Front Runner p.15
【連載第3回】
現代アートのすゝめ

ほっとな出会い p.16
絵描き・漫画家 石井 明日香さん

── 人生に哲学を。AI時代の今だからこそ疑い、問い続ける意義がある。

哲学者 小川仁志さん

哲学者になった理由

哲学は〝難解で退屈な学問〟というイメージをもたれているかたも多いと思います。私自身も学生時代は知識を丸暗記する学問といった認識で、まさか自分が哲学者になるとは夢にも思いませんでした。しかし、社会人になって、人生のどん底にいた時の自分を救ってくれたのが哲学だったのです。だからこそ、多くのかたにその魅力を知っていただきたくて、専門用語を使わず、なるべくやさしい言葉で哲学を説いています。

自分が消えたらどこへゆく?

お笑いの本場・関西生まれのせいか、子どもの頃から人を楽しませることが大好きでした。授業中でも隙あらば笑いを取りにいくものだから、小学校では周囲から〝いらんことしぃ〟と呼ばれていました。関西弁で〝余計なこと(いらんこと)をする子〟という意味です。しかし、その一方で「生命とは?」「人生とは?」と、物思いにふける一面もありました。

小学一〜二年生の頃だったと思いますが「自分が死んだら世界はどうなるの?」と父に尋ねたことがあります。すると父は「そんなことは考えなくていい」と〝有無を言わせぬ〟という雰囲気で会話を打ち切りました。新聞記者として日頃、真実に向き合っているはずの父だったので、なにか禁忌にふれたような気がしたものです。

高校生になっても内省的な傾向は変わらず、「こんなことで悩んでいるのは自分だけなのか?」「自分は少し変わっているのだろうか?」と思いつつも、周囲と足並みを揃えるように受験勉強に励みました。〝いい大学に入りいい会社に入ったら成功〟という神話が今以上に信じられていた時代だったのです。

真の幸せを追い求めて

努力の甲斐あり、京都大学に合格し、卒業後は大手商社に入社を決めました。周囲からはエリート街道を歩んでいるように映っていたでしょう。しかし、ここにきて歯車が狂い始めます。せっかく入った商社を四年めで退職してしまったのです。転機となったのは会社の語学研修で訪れた台湾留学。現地の学生たちと膝を突き合わせて話す機会があったのですが、彼らの「この国をよくしたい」という純粋で強烈な思いを知り、「自分も直接社会の役に立つ仕事がしたい」と触発されたのです。商社も誰かの役に立つ仕事なのですが、今にして思えば長年くすぶっていた何かに火がついたのでしょう。

ところが、たいした計画もなく辞めたものだから、人権派の弁護士を目ざすか、政治家か、活動家か、と迷走したあげく、何者にもなれず東京でだらだらとフリーターをしていました。貯金はすぐに底をつき、生活は瞬く間に困窮。ギリギリの暮らしを四年半ほど続け、気づけば二十代の終盤を迎えていました。かつての同僚や同級生は華やかな活躍をしているのに、一方こちらはアラサーのフリーターです。それまで挫折らしい挫折を経験してなかったこともあり、プライドはズタズタ、精神的にもどん底でした。社会から取り残されてゆく不安で夜は眠れず、心

PROFILE

1970年京都府生まれ。哲学者・青山学院大学教授。京都大学法学部卒業。名古屋市立大学大学院博士後期課程修了。博士(人間文化)。徳山工業高等専門学校准教授、米プリンストン大学客員研究員、山口大学教授を経て現職。専門は公共哲学。伊藤忠商事、フリーター、名古屋市役所勤務を経た異色の哲学者。「哲学カフェ」を主宰するなど、市民のための哲学を実践する。NHK・Eテレ『世界の哲学者に人生相談』、『ロッチと子羊』では指南役を務めた。ベストセラーとなった『7日間で突然頭がよくなる本』(PHPエディターズ)や『ジブリアニメで哲学する』(PHP文庫)など著書多数。YouTube『小川仁志の哲学チャンネル』でも発信中。

身に不調をきたすようになり、最後のほうはひきこもりのような状態でした。

「さっさと再就職すればよかったのでは？」と思われるかもしれませんが、私はその時、何かを掴みたかったのだと思います。〝いい大学を出て、いい会社に入れば幸せ〟であるはずが、私はずっと幸せではなかったのです。安易にどこかに勤めてもまた同じことが起こるでしょう。今度こそ自分らしい生き方を見つけたいとあがいていたのです。そんな折、図書館で手に取ったのが一冊の哲学入門書でした。

疑って、疑って、疑え

哲学との出会いは衝撃でした。巷には「こうすれば幸せになれる」「成功できる」というようなノウハウが溢れています。しかし、哲学だけはその真逆で「全てを疑え」と迫ってくるのです。「疑って、疑って、その果てに自分の答えをつかみ取れ」と。「これこそ自分に必要なものだ」と直感し、気づけば哲学の世界にのめりこんでいました。その後、働きながら大学院に通い博士号を取りましたが、その六年間は常に寝不足で、夜中にキーボードを打ちながらよく寝落ちしていました。しかし、辛いとは思いませんでした。というより、本心から幸せでした。

プレゼントとは何か？

一九九〇年代にフランスで始まった「哲学カフェ」はリラックスした雰囲気でお茶を片手に哲学対話を行う試みです。私も比較的早期から取り組んでおり、かれこれ二十年ほど続けていますが、いつも新たな発見がありますね。

子どもと一緒に参加する「こどもと大人の哲学カフェ」で、こんなひと幕がありました。「プレゼントとは何か？」という問いを立て、「プレゼントをほかの言葉で言いかえてみて」と投げかけたところ、ある少女がこう答えたのです。

「プレゼントはプレゼントのままでいいと思う。その言葉も誰かが私たちに贈ってくれたプレゼントだから」。

その瞬間、「子どもが言うことだから……」と斜にかまえていた周囲の大人たちはハッと息をのんでいました。そして、尊敬のまなざしへと変わったのです。たった一言で他者へのまなざしやふるまいまでもが変わる――。哲学対話がもたらす恩恵は計り知れないと思いませんか？　そもそも、子どももこの世界を構成する一員なのですから、彼らの意見に耳を傾け、世界や人生について一緒に考えるのは自然なことです。今の社会には大人と子どもが本質的なことを語り合う場が少なすぎます。実際、子どもたちからは「大人とじっくり話すことがあまりないからおもしろかった」「大人はいろいろ考えていることを知った」という意見が寄せられました。

AIは回答し、哲学者は問いかける

最近、悩みごとをAIに相談する子どもが増えているそうです。苦しい胸のうちを吐露すること自体はよいことかもしれませんが、痛みを感じることもなく、死ぬこともないAIがその子に寄り添った対応ができるとは私は思いません。例えば「なぜ死んではいけないの？」と聞かれたら――？

AIは最大公約数的な正解を答えるでしょう。ですが、私なら答えは言いません。哲学者の仕事は〝問い〟を投げかけることです。それは「なぜそう思うの？」「あなたはどう思う？」とただ尋ねることとは違います。異なる世界から課題に光をあて、多様な視点で思考するように導く〝問い〟を熟慮の限りを尽くし練り上げること。自分という個の視点だけで捉えるならば、命は自分だけのものですが「自分が死んだ後、世界はどうなっている？」と問えば、自分がいなくなった世界で、親しい人が悲しむ姿を思い浮かべる子もいるのではないでしょうか？　これが人間の〝問う力〟で、AIにはできないことなのです。

知識や情報が簡単に手に入る今、教育現場に求められるのは、子どもたちが答えを導き出せるような問いを立てること、そしてともに考えて語る場だと思います。一つの問いに対し先生がたも子どもと一生懸命に考え、語る。そういう授業があってもいいのではないでしょうか？

人生に哲学を

社会が不安定になると、人は哲学を求めると言われています。昨今の哲学ブームの根底には、AIの台頭によって〝人間ならではの存在意義〟が揺らいでいる現実があるのではないでしょうか。人々が藁をも掴む思いで哲学に手を伸ばしている。私にはそう見えてなりません。

AIにはできず、人間にしかできないこととは？　それは常識を疑い、自ら問いを立て、考え続けること。それこそが哲学です。人生の岐路で立ち止まったときは、ぜひ哲学という〝知の道具〟を頼ってください。あたりまえを疑い、本心に問いかける。その先にこそあなたらしく、よりよい人生が待っていると信じています。

●新刊のご案内

●大人と子どもが対話するきっかけとなる哲学書を多数手がける小川仁志さんの新刊。右から順に『哲学すごろく』『教科書の名作で哲学する』（ともに教育出版）。

Photo（表紙、P2-3）：Horie Hiroca

多様性に応える学びへの取組

みらい分校が目ざす令和時代の夜間中学の姿

千葉県 松戸市立古ケ崎中学校 教頭
（元 松戸市立第一中学校みらい分校 教頭）
嘉村（かむら） 英男

ポイント

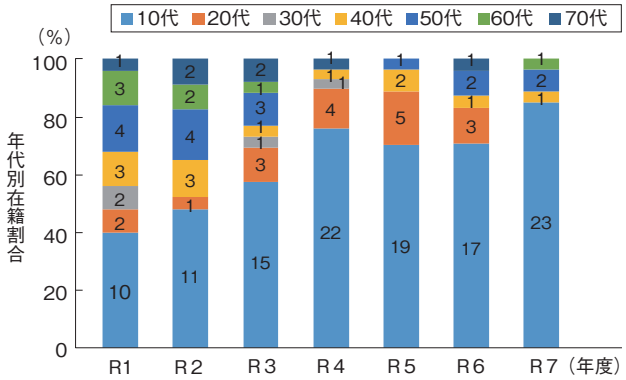
①みらい分校の原点と、現在のみらい分校が目ざす方向性
②学びを支える連携・協働のネットワークづくり
③義務教育の実質的な保障に向け、これからの夜間中学の価値を探る

夜間中学みらい分校の現在

『なんということでしょう。夢が現実となったのです。私ももう一度中学校生活を体験できるのです。今度こそ、この学び舎でたくさんのことを吸収し、年齢もさまざまな学ぶ仲間と一緒に人生の新たな一ページを築いていきたいと思います。』

新しい時代の夜間中学として、平成三十一年四月に開校した松戸市立第一中学校みらい分校（以下、本校）の入学式において、新入生代表の生徒が述べた誓いの言葉の一節である。今も語り継がれる本校の原点といえる。

本校は不登校などにより学び直しを希望する人や、近年増加する外国籍の人の学びの場として、公教育のセーフティネットを充実させることを目的に開校した。開校当初は、十代から七十代まで、各世代の日本人生徒が始業前から熱心に教科の予習復習に取り組み、授業中は学べるうれしさをにじませる姿があったと聞く。



●年代別在籍者数の推移

現在は約八五％が十代の生徒である。不登校や日本語力の不足で十分な学習機会を得られなかった生徒や、事情により外国から来日し、高校受験に必要な中学校卒業資格を求めて入学する生徒が大部分を占めている。そこに年配者が交わり、文化や言語を越えてともに学び合う。それが現在の本校における学びの風景である。

一人一人にどう寄り添うか

生徒はそれぞれの人生で挫折や困難を経験していることが多い。言葉にできないほどつらい過去を抱えている生徒もいる。それでも再び学ぶ機会を求めて入学を決断する思いは今も昔も変わらない。だからこそ「中学生としてこうあるべき」と一律に考えることはせず、生徒に寄り添う姿勢を大切にしてきた。一方で、生徒の属性は変化し、深刻な経験不足、小学校低学年の学習や日本語指導を必要とする生徒の増加など学習ニーズは拡大している。本校での学びを将来の社会的な自立と自己実現につなげることを考えたときに、生徒が在籍中に身につけるべきことは何か、現状分析とともに職員どうしのワークショップや管理職との面談を通じ、一年かけて全職員で検討した。そ

の結果は次の四点に集約されている。

- 学ぶ楽しさを実感できること
- 社会性を習得すること
- 多様な考えや価値観を相互理解すること
- 心身の健康を保持すること

「違いを力に」という学校長の考えを軸に、これらを学校全体の学びの中心にある価値として位置づけた。教科の基礎的な学び直しや、日本語学習を土台にしながら、校外学習、人間関係づくりのトレーニング、自己表現する場の設定など、実践的な活動を積極的に取り入れている。卒業後を見据え、一人一人の可能性が広がることを意識して学びをデザインするという発想のもと、実態に応じた特別の教育課程や支援体制の見直しを進めている。

教育活動・生徒支援における連携・協働

多様化の時代だからこそ、多様な教育が求められる。本校では関係各所との連携・協働を重視し、生徒・教職員・地域住民が一緒にスポーツを楽しむ機会や、盆踊りなどの町会行事への参加、近隣の保育園児との交流など、双方向の関わりを広げている。市内の大学や日本語学校の学生は、現在学んでいることや将来の見通しを語ってくれ、生徒とのふれ合いから新たな学びを得ている。こうした多様な立場の人との関わりの中で、生徒はつながりを意識し、自己肯定感を高めている。一方で、十分な教育を受けられなかった背景には複雑な事情があり、登校を続けることは容易ではない。学校だけでは解決が難しい課題も多く、市役所をはじめ、SC・SSW、民生委員、基幹相談支援センター、国際交流協会、地域の子ども食堂など多くの支援を得てネットワーク型の支援が進められている。まさに地域とのつながりは本校の貴重な教育資源である。

●人生初の浴衣で盆踊りを楽しむ。

昼間の第一中学校と分校である本校は立地的にやや距離はあるが、学校行事や部活動などの機会を捉え、生徒が互いに行き来しながら交流している。ともに活動することは双方の生徒にとって貴重な学びとなっている。特に昼間の生徒に対して、本校の生徒が自身の不登校の経験や、来日から現在までの経験、今後の夢や目標を語る「ゲストティーチャー」の取組は大きな意義をもつと捉えている。昼間の生徒には「なぜ学ぶのか」「どう生きるのか」を考える契機となり、本校の生徒にとっては、他の誰かのためになったという自己有用感の向上につながっている。教職員にとっても教育の視野を広げる有効な機会である。

教育機会の確保と地域支援体制の充実

令和六年度からは二つの取組が始まった。第一に、市教育支援センターと連携した学習支援である。日中に在籍校へ通うことが難しい生徒を、在籍校に籍を置いたまま夜間中学で通級生として受け入れ、学習を継続できる環境を整えている。第二に、日本語教育の普及・啓発である。日本語指導が市内学校教育の重要な課題となっていることから、希望する学校に対して本校の日本語指導のノウハウや教材を提供し、校内体制の構築についての支援を行っている。さらに、小中高校・大学の教員、外国につながる子どもを支援するNPO等が交流し、情報共有を行う場の提供にも取り組んできた。義務教育の実質的な保障に向けて、本校にできる貢献を続けていきたい。

つながりがみらいをささえる

本校には、開校以来ずっと大切に受け継いできた学校行事「文化学習発表会」がある。これは、各教科を中心とした学習の成果を生徒が発表する場であり、生徒の家族や卒業生、近年では日頃から学校を支えてくださっている多くのかたがたにも参観いただいている。その文化学習発表会で、卒業生から心に残るメッセージをいただいた。

『人間にはやさしさがある。希望がある。だから社会に貢献することを忘れてはいけない。』

夜間中学での学びを通して受けた支えを社会に還元したいと語る卒業生の言葉は、会場にいるすべての人の心に深く届いたに違いない。発表会のフィナーレでは、全員で「上を向いて歩こう」を合唱することが恒例であり、多くのかたがたとのつながりに支えられて生徒の成長が育まれていることを実感できる。本校にとっては感慨深い一日である。

これからも本校は、令和時代の夜間中学の姿を模索しながら、自立と自己実現への新たなきっかけとなる場であり続けたい。

多様性に応える学びへの取組

「らしさ」を育む教育課程と「信じて待つ」姿勢

神奈川県 鎌倉市立由比ガ浜中学校
分校長 岩田 明

ポイント

①「有能な学び手」である生徒とのフラットな関係性や、柔軟な時数設定による安心できる学びの土壌づくり
②独自教科ULTLA（ウルトラ）・CTime（シータイム）等を通じ、個の興味から社会へと広がる探究と実体験を教科目標に接続
③「信じて待つ」姿勢を貫き、試行錯誤を価値づける独自の評価を通じて、生徒の主体性と自信を育む

「自分らしさ」を支える関係性と環境づくり

令和七年四月に開校した由比ガ浜中学校は、さまざまな背景から従来の学校生活で立ち止まらざるを得なかった生徒が、自らの歩調で学びをつくっていく「学びの多様化学校」である。本校が掲げるスクールビジョン「自分らしく学び、自分らしく成長できる学校」は、生徒一人一人を「有能な学び手」として信頼し、自律的に学びを調整できる環境を構築しようとする挑戦でもある。このビジョンの実現に向け、本校では学校における「当たり前」を問い直し、関係性や評価のあり方を一から編み直した。教職員は「スタッフ」と呼ばれ、生徒とはニックネームで呼び合うこともあるフラットなパートナーシップを築いている。子どもや保護者らが協働して作り上げた「つどいスペース」を核に、没頭、対話、休息といった多様なニーズに応える場が校内に点在している。

● 「つどいスペース」での様子。

さらに、年間授業時数を一般校より少ない七七〇時間へと柔軟に設定し、生徒のコンディションに寄り添う「余白」を確保した。こうした「自分たちが大切にされている」という実感と、心身のエネルギーを蓄えるための時間的・空間的ゆとりが整って初めて、生徒たちの自発的なエネルギーを蓄える土壌が形成されていくと考えている。

「待つ」ことで立ち現れる生徒の主体性

教育実践の根幹にあるのは、生徒を「信じて待つ」という覚悟である。大人の側から学びを急かすのではなく、安心できる環境の中で生徒の内側から動機が立ち現れる瞬間を、私たちは覚悟をもってじっと待つ。こうした「待つ」姿勢が実を結び、開校から時間が経つにつれ、生徒たちの主体的な動きが多方面で見られるようになった。昨年の夏休みに行われた校内宿泊学習では、生徒たちが自ら「学校に泊まりたい」という願いを口にし、スタッフの伴走のもと二日間の行程を自分たちの手で作り上げた。さらに一学期の終わりには、生徒の間から「自分たちで学

校をよりよくしたい」という声が次第に上がり、生徒たちの主導で委員会活動が組織された。また、学びの時間に、「つどいスペース」等で一人、あるいは仲間と過ごす場面がある。これを私たちは「停滞」ではなく、子どもたちが一日の学びの文脈の中で、今の自分に必要な環境を自ら選ぶ「自律的な環境選択」であると捉えている。こうした自己決定と、それが尊重される経験を積み重ねることで、生徒は「自分で決めて動く」という主体性を、驚くほどの速さで取り戻していき、自己肯定感を高めていく。

「ULTLA」と「CTime」

本校の学びの中核をなすのが、年間一四〇時間を充てる教科「ULTLA」である。毎学期初めに行われる「自分学」では、科学的なアセスメントを活用して自らの認知特性や強みをメタ認知し、自分に合った学びのスタイルや環境の選び方を理解する。年間を通して行われる「MY探究」は、生徒一人一人が自身の「好き」や「得意」に徹底的にこだわる時間である。自身の興味関心を深く掘り下げ、表現方法を模索し、学期末の共有の場である「MYフェス」に向けて個別の探究に没頭する。自身の興味を、デジタルツールを駆使したプレゼン資料にまとめ上げる生徒や、独自の創作活動に打ち込む生徒など、スタッフが適切なリソースを提供する中で、生徒は自発的な動機に基づき、独自の「問い」を深めていく。

さらに学びは、他者との協働や社会課題にふれる「YOU＆I探究」、そして地球規模の視点で食や環境を考える「EARTHプロジェクト」へと展開する。後者の活動として行われた「海藻ポーク」のプロジェクトでは、ビーチクリーンによる海藻回収から、鎌倉初のブランド豚の飼料作り、調理、実食まで経験した。地元漁師さんを招いた魚の三枚おろし体験で「かわいそうとおいしそうの間」を問うなど、本物とふれ合い、心が揺さぶられる「身体知」を重視したプログラムを積み重ねている。スタッフから教えられるのではなく、実体験を通じて「自分ごと」として課題が捉え直されたとき、納得感のある確かな学びが生まれていく。

●「MYフェス」でピアノ演奏を行う生徒。

また、実技四教科を再編した「CTime」も、自律的な学びを構成する重要な要素である。ここでは「MYぞうりづくり」、「専門的な出汁の取り方を学ぶ調理実習」、「トーンチャイム＆DJマシーン体験」、「由比ガ浜中の模型を3Dプリンターでつくろう」など、スタッフが提案するプログラムに挑む「おまかせコース」、自らテーマを定めて制作に没頭する「MYデザインコース」、そしてそれらを自由に行き来する「よくばりコース」という三つの選択肢を用意した。生徒は自らのコンディションや興味に合わせて、学び方を自らデザインしていく。

多様な歩みを価値づける「学びのみとり」

本校では「通知票」を「学びのあしあと」、「評価」を「学びのみとり」と呼んでいる。数値や結果だけで切り取るのではなく、試行錯誤のプロセスそのものに光を当て、その固有の価値を承認しようとする私たちの姿勢の表れでもある。例えば海藻ポークの調理や三枚おろし体験において、生徒が放った「肉を焼くには酸素が必要だ」という発見は理科（燃焼）の学びに直結し、ブランドを立ち上げる仕組みや地域経済への関心は社会科（公民・起業・郷土理解）の学びへとつながっている。また、「MY探究」での調査や表現の工夫は、国語科の情報整理や表現の技術に紐づいている。こうした探究で見せた生徒の鋭い発見や葛藤を、スタッフは丁寧にくみ取り、各教科の学習目標に紐づく本質的な成果として価値づけていく。他者との比較ではなく、過去の自分からの変容が「みとり」を通じて承認されることで、生徒は自己を肯定し、次の一歩を踏み出す勇気を得ていく。

由比ガ浜中での日々は、生徒にとって自己決定の連続である。時に立ち止まり、自分を見つめ直す「静かなる時間」もまた、自立への大切なプロセスである。「わかっていることが、一段深い水準においてわからなくなる」ような知的な葛藤を愉しみ、自らの「らしさ」を誇れるようになるまで、一人一人の歩みに伴走し続けていきたい。

9年間で育む「自分を舵取りする力」

～キャリア・パスポート（電子版）がつなぐ成長の軌跡～

町田市立小中一貫ゆくのき学園
武蔵岡中学校・大戸小学校
校長　鈴木　元（げん）

■大戸小学校と武蔵岡中学校が統合し施設一体型小中一貫校として平成24年に誕生した「町田市立小中一貫ゆくのき学園」。

変化の激しい時代を生き抜く「羅針盤」

東京都町田市の最西端に位置する「町田市立小中一貫ゆくのき学園」は、緑豊かな自然に囲まれた施設一体型の小中一貫校です。児童・生徒数は約160人、全学年単学級という小規模校ながら、9年間を見通した独自のキャリア教育を推進しています。

本学園が掲げる研究主題は「夢をもち たくましく しなやかに生きる」です。特に「しなやかに」という言葉には、予測困難なVUCAの時代において、向かい風を受けても折れることなく、自らを柔軟に調整しながら未来を切り拓いてほしいという強い願いをこめています。

既存の活動に「キャリアの視点」を

キャリア教育の推進において、多くの学校が直面する壁が「新たな行事や授業の追加による教職員の多忙化」です。ゆくのき学園の改革において重視したのは、新設ではなく「既存の教育活動をキャリア教育の視点で見直す」という発想の転換でした。学校規模に依存せず、普遍的に取り組める手法を模索した結果、育成すべき能力を四つの色と役割に定義した「アイコン」を導入しました。

これらは単なるスローガンではありません。学習指導案に明記されるのはもちろん、教室の黒板にも常時掲示されています。授業の冒頭や振り返りで、教師が「今の活動はどの力を伸ばしているか」と自らに問いかけ、子どもたちも「今のグループワークは『つながる力』を使っている」と自覚する効果があります。日常の学びに「キャリアのアイコン」を据えることで、自分の学びを客観視する「メタ認知」の環境を徹底して整えました。

9年間をデジタルで蓄積

日々の学びを一時的な体験で終わら

せず、9年間の連続した軌跡として蓄積するために活用しているのが、クラウド型表計算アプリを活用した「キャリア・パスポート(電子版)」です。

①機能の集約と一元化

本学園の電子版は単なる振り返りシートのデジタル化に留まりません。学期ごとの目標、行事の記録、そして「通知表の所見」までもが一つのプラットフォームに集約されています。子どもたちはいつでも過去の自分の決意や先生からの言葉にアクセスできます。

②発達段階に応じた「記録の質」のグラデーション

9年間の成長を記録し続けるため、ICTスキルの発達段階に合わせた入力方法を採用しています。1～2年生はタイピングの代わりにプルダウン選択を活用し、作品を写真のまま保存します。3～9年生では、自ら内面を言語化するだけでなく、納得のいく成果物を画像として自選し、ポートフォリオに加えます。「何を残すか」を選択する過程自体が、自身の価値観を再確認する重要な学びとなります。

③「三者による対話」を生むプラットフォーム

教師だけでなく保護者も直接コメントを入力し、子どもの成長をリアルタイムで見守ります。家庭と学校が同じデータに基づき、数値化できない変容や努力をたたえ合う。こうした多角的な承認が、子どもの自己理解をさらに深めていきます。

「手帳(スケジュール帳)」との相乗効果

もう一つの柱が、日常的な自己管理能力を支える「手帳(スケジュール帳)」の活用です。キャリア・パスポートを「長期的な航海図」とするならば、手帳は「日々の操舵」にあたります。

中学生を中心に、学習計画を立て、実行し、振り返るPDCAサイクルを回します。そこで得られた「自分に合った学び方のコツ」や「壁にぶつかったときの心の変化」を、今度はキャリア・パスポートへと抽象化して言語化します。

この「日常の記録(手帳)」と「長期の蓄積(パスポート)」の重層的な仕組みにより、「自分の役割を理解し、集団のために貢献できる」と実感する生徒の割合は、導入後わずか1年で81・9%から92・3%へと大幅に向上しました。

■子どもたちが当番でお世話をしている二匹のヤギ。命の学びもキャリア教育の一環。

生涯にわたる「羅針盤」をその手に

キャリア教育の本質は、職業選びのスキルではなく、自分を理解し、他者とつながりながら、一歩ずつ前へ進む「生きる力」そのものを育むことにあります。

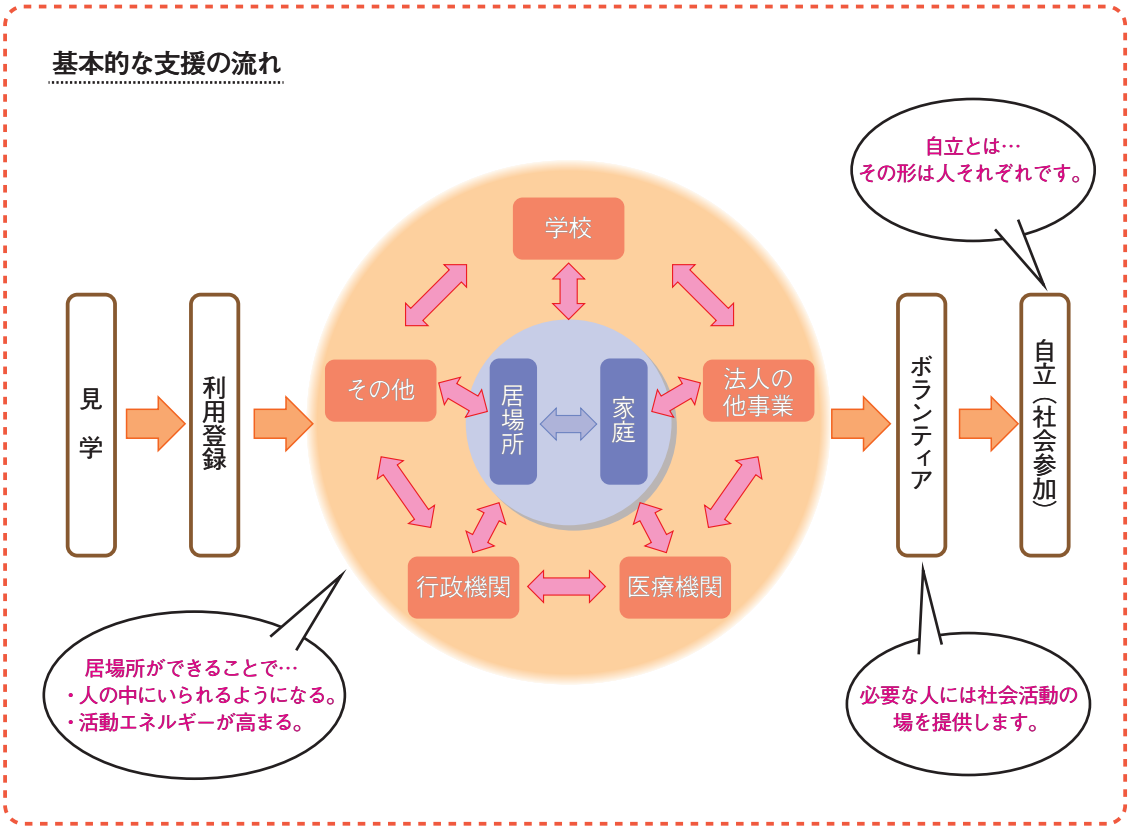
9年間の歩みが刻まれたキャリア・パスポート(電子版)は、卒業後に迷いが生じたとき、ふと立ち止まって自分を信じ直すための「心のよりどころ」になるはずです。

デジタルという新しいツールを使いながらも、その根底にあるのは、子どもたちの変容を見守り、たたえ続ける大人たちの温かなまなざしです。ゆくのき学園の挑戦はまだ半ばですが、子どもたちが手にしたこの「羅針盤」が、それぞれの未来を優しく照らし続けることを願ってやみません。

■自主的に「授業のふりかえりカード」や電子版キャリア・パスポートに記録をする児童・生徒たち。

貧困と孤立の中で生きる子ども・若者の居場所づくりを20年

認定NPO法人さいたまユースサポートネット
代表理事　青砥（あおと）　恭（やすし）



■さいたまユースサポートネットが推進する若者の自立支援事業の概要図。必要に応じて外部（学校、行政機関、医療機関、さいたまユースの他の事業など）と連携し、「本人が望む自立」を地域ぐるみでサポートする。

埼玉県の高校教師を退職間際の2009年の秋に、『ドキュメント高校中退』（ちくま新書）を出版しました。この本は、1990年後半から2009年まで、子どもや若者たちの貧困が顕在化した時代、埼玉県を中心に大阪、東京、神奈川など都市部の高校中退者の聞き取りと量的な分析をまとめたものです。学力の低さ、学校（文化やシステム）になじめない、家庭の困窮・崩壊などの背景から、中退した生徒たちがどのように学校教育や地域から排除されていったか、その過程を考察したものです。

連鎖する貧困と格差

そこで見えたことは、①親の経済力と子どもの学力は強い相関があること（現在では、当然のように受け止められていますが15年前には衝撃でした）。②親の経済力と子どもの学力格差は1990年代以降急激に拡大し続けている。③貧困層の子どもや若者が、拡大する格差の中で学ぶ意欲を失い、学びの場から離脱している（現在、不登校の激増につながっています）。④貧困と格差は親から子へ連鎖する、そんな事実が明らかになりました。

当時、学びの場から排除され、高校を中退する高校生は毎年、全国で十数万人にも及び、私が取材した埼玉県、大阪府では複数の高校が入学者の半数が一年生で中退していました。しかも、彼らは社会とつながることなく、孤立し、周縁化し、さらに、その若者たちが日本社会の最底辺層（ワーキングプア）を形成していったことも明らかになっています。そこから、社会で周縁化した中退者をどのようにして社会につなぐか、若者の「社会的包摂」「社会参加」を目ざす政策や取組が日本社会の大きな課題になっているのです。

「働くしか選択肢がなかった」

私が出会った中で「忘れられない若者」を一人、紹介しましょう。（年齢は2013年当時です）

直美（当時18歳・仮名）は高校を中退した理由を「人間関係」だと話してくれました。聞けば、「すぐにメール

の返信がなかった」など、些細なことで言葉での傷つけ合いが始まったそうで、関係性をつくる力や修復する力が育っていないことがうかがえました。直美の両親は中学の頃、それぞれ別の相手と家族をつくったので、直美も兄も帰る家を失いました。高校入学後、直美はモーレツに働き始め、間もなく中退しています。学校どころではないというのが彼女の本音でした。朝から夕方までは中華料理屋、夜は９時から夜中までスナックで男性客を相手に仕事をしていました。「働くのが好き」と話していましたが、一人で生きていくにはそんな選択肢しかなかったのです。

高校を中退して、社会の周縁で生きている多くの若者たちから話を聞きましたが、家族の支えがないだけでなく、逆に親や家族が子どもの人生を阻害しているケースもありました。「子どもと母親と義父」・「子どもと母親と母の愛人」・「子どもと義父だけ」の世帯も多く、子どもが親や家族を支える「ヤングケアラー」、虐待・ネグレクトのケースなど家庭が居場所とは程遠いケースも少なくありませんでした。貧しさへのいらだちが子どもや女性など弱者への暴力、DVや虐待につながっていました。子どもへの虐待の8、9割は、実の父親か母親によるものです。

活動の原点となった学習支援と居場所づくり

2010年頃から、多くの学生や市民ボランティアと一緒に埼玉県で生活保護世帯の「学習支援」と、「たまり場（居場所）」活動を始めました。行き場のない若者たち、早期に学校から離れた子どもたちに「帰属できるコミュニティ（仲間づくり）」「安心して学べる場（学び直し）」を保障することは大きな社会課題だと考えました。当時、日本にはほとんどありませんでしたので、そのモデルをつくることを目ざしました。

地域の誰かとつながり、相談できる誰かがいれば

もし、地域に信頼できる隣人（機関）がいて相談できていれば、防げた虐待やネグレクトも多かったでしょう。虐待やネグレクトに関わる多くの親たちは孤立していました。子どもたちが追い詰められている原因は、学校の競争化と権力性にあるように思えます。教師は常に権力を背負って仕事をせざるを得ません。そんな学校に親和性がある子どもとなじめない子どもが明らかに二分化しています。そんな閉鎖的な学校の状況や教員の負担感を減らすために、子どもの貧困対策大綱で「学校のプラットフォーム化」が提起され、スクールソーシャルワーカーの配置はあっても、ケースワーカー、児童相談所、要保護児童対策地域協議会等の福祉部門や放課後児童クラブや地域の子どもに関わる市民団体（NPO）と教育委員会・学校の連携強化はなかなか進んでいません。文科省が進める「チーム学校」も同様です。子どもにとって学校が最大の居場所であり、社会資源であることは疑いようがありません。学校が子どもにとって最良の居場所であり、子どもを育む拠点になるために、地域はどのように協働すればいいのでしょうか。

地域で支える仕組み「ローカル・コモンズ」

必要なのはそんな子どもや家族を支える地域プラットフォームです。学習支援、居場所、相談、就労、福祉。それらを拠点化、ネットワーク化し、地域や遠くからでも、興味がある、やってみたいという人たちの交流やアイデアが集まる開かれた場所が必要です。そして重要なのは、そんなアイデアを地域全体で共有し、持続的な活動にすることです。そうすることで支援は「サービス」から「地域の共有財」へと発展します。私は失われた公共空間を地域の力で編み直す営みを、誰のものでもない、みんなのもの「ローカル・コモンズ」と考えています。

さいたまユースサポートネットの活動
詳細はこちらからご覧ください。

■子どもの居場所「たまり場」をはじめ、学習支援、不登校支援、就労支援、食の提供、地域マルシェ、サッカー教室など多様な活動を展開している。

全国各地のさまざまな取組を紹介します。

愛知　子どもが主体となる学校づくりへの挑戦

江南市立西部中学校　校長
（元　江南市立布袋中学校　教頭）　長瀬　基延（もとのぶ）

学校方針「子どもの声で共に学校をつくる」の実現に向け、教員、保護者、地域、生徒がワンチームとなり対話を重ねてきました。中でも「授業を考える会」と「プロジェクト活動」は、生徒が主体的に学校生活の質を高める実践です。

「授業を考える会」には教員、学校運営協議会委員、保護者、生徒が参加し「よりよい授業、よりよい学びとは何か」を語り合いました。生徒からは「自分で選び、決められる場面を増やしてほしい」との声が上がる一方、「先生が決めてくれたほうが楽だ」「自分で選ぶのは疲れる」といった本音も聞かれました。そこには「与えられる学び」に慣れ、自ら選択し責任を引き受けることへのとまどいがにじんでいました。主体的な学びは掛け声だけでは実現しません。子どもにも教員にも勇気を要する営みです。対話を通して「与えられる学び」から「自ら問い、選択し、つくり出す学び」への転換が共有され、授業は教師が「与える」だけでなく、学習者と「共につくる」意識が広がっています。

「プロジェクト活動」では、有志の生徒がチームを結成し、学校行事などを主体的に立案・運営します。体育祭や文化祭では、提案から当日の運営までの多くの場面で生徒に判断を委ね、教員や地域は伴走しました。意見の対立や計画の見直しも経験しましたが、合意形成の過程が学びとなりました。学校運営協議会や保護者と連携した「夏祭りプロジェクト」では、地域住民や卒業生を含む 1,000 人超が参加し、生徒の企画が地域を一つにしました。挑戦が地域を動かす実感は、生徒の自信につながっています。

こうした実践を通して、生徒の当事者意識は高まっており、「自分たちの学校を自分たちでよくしていく」という意識も芽生えています。子どもを権利の主体として捉え、子どもが主語となる授業づくり・学校づくりへの挑戦の歩みは続いています。

岩手　小さな学校、大きないのちの学び

西和賀町立沢内小学校　校長　熊澤　裕樹

岩手県西和賀町の山あいにある沢内小学校は、全校児童 57 名の小規模校です。町の高齢化率は 50% を超え、少子高齢化が進む中、地域とともに歩む教育のあり方を模索してきました。

本校では、かつて乳幼児死亡率ゼロを実現した元沢内村長・深澤晟雄（ふかさわまさお）氏の「生命尊重」の精神を受け継ぎ、「命輝く教育の実践」を教育理念の柱の一つとしています。子どもたちが命の大切さを実感し、他者への思いやりの心を育むことをねらいに、さまざまな学びを展開しています。

例えば、地域の高齢者とふれあう「認知症講座」や「介護の魅力講座」、障がいのあるかたなどの生活を体験する「キャップハンディ体験」を実施しています。また、６年生を対象に、町立西和賀さわうち病院の小原院長から医療現場の話を伺うキャリア教育も行い、患者さんへの思いや、緩和ケアの大切さを学ぶ「いのちの学習」は、子どもたちの心に深く刻まれています。

こうした取組を進める中で、「命」を扱う学習であること、地域や関係機関との連携の難しさなど、考慮する点もありました。しかし、少子高齢化が進み、命の重みや支え合いの大切さがより身近に感じられるこの地域だからこそ、「命輝く教育」の意義は大きく、地域のかたがたやさまざまな関係機関との深い理解と温かな協力に支えられながら、子どもたちの心に残る学びへとつなげています。

学習後には、深澤晟雄氏の覚悟や患者さんに寄り添う医師の姿に心を動かされ、「自分も誰かを支えたい」と語る児童もおり、命と向き合う学びが確かな変容を生んでいます。

今後、数年後に開校予定の小中一貫校においても、深澤晟雄氏の精神を受け継ぎ、「命輝く教育の実践」をさらに深めていきたいと考えています。

福岡　英語イマージョンで理解し、表現する力を育てる

前　学校法人福岡雙葉学園
福岡雙葉小学校　副校長　御厨（みくりや）　正治

本校のグローバルコミュニケーションコース（通称 GC コース）は、英語を“学ぶ”のではなく、授業や学校生活の中で日常的に“使う”ことで、自然に全身で英語を身につけさせています。このことにより、子どもたちが自ら発想し、表現することに自信をもち、自分の意見を英語で表現できるようになっています。

【1年生の時間割例】
（福岡雙葉小学校　SCHOOL GUIDE 2026より抜粋）

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
Moraning Activity	Reading Time				
1	Math	Religion	Life Skills	Japanese	PE
2	Japanese	Math	Japanese	Japanese	Japanese
3	Life Skills	Music	Art	English	Music
4	Life Skills	Japanese	Art	PE	HR
5	PE	English	Japanese	Math	Math
6	Japanese	Japanese	—	—	—

英語での活動・授業

大きな学びの特徴として、①主に算数と理科を英語イマージョンで学習すること（1年生から算数や生活科、体育を英語で学びます）②外国人・日本人教員の W 担任制を採用していることの二つがあります。カリキュラムは文部科学省の学習指導要領に沿ったもので、教科書は英訳したものを使用しています。また、日本語での理解も深められるように、テストは英語と日本語の両方で実施。外国人教員は英語圏の国の出身で、かつ全員が教員の資格を所持しています。英語環境を整えるうえで、教科学習以外に朝の会や掃除時間、休み時間などの活動も英語で進めています。

特に、朝の活動の時間では英語力強化を目的として「Reading Time」を週につき1時間追加で取り入れています。また、3年生から6年生は、夏休みに市内の青少年自然の家で二泊三日の「GC サマーキャンプ」を、福岡雙葉高校生をチューターに迎えて実施。他学年の友だちと英語で交流を深めながら、多彩な活動を行っています。

このような教育活動を通して、GC コースでは低学年で「TOEFL Primary® Step 1 / Step 2」に挑戦し、基礎をしっかりと固めながら英語力を伸ばしていきます。さらに、6年生では集大成として「TOEFL Junior® Standard」を受験。多くの子どもたちが高いスコアを収めており、グローバル社会という広い舞台で、自らの力を存分に発揮できる自信と実力を養っています。

愛媛　書道文化醸成事業 ～「楽しい」が書の始まり～

四国中央市役所　魅力創発課
書道パフォーマンス振興室　井川　英男

日本一の紙のまち、愛媛県四国中央市。本市では、夏に全国から 100 校を超える学校が参加する「書道パフォーマンス甲子園」、冬に 300 人を超える小中学生が書の腕前を競う「新春競書大会」を開催しています。さらに今年3月には、書道パフォーマンスの大学日本一を決める「書道パフォーマンスインカレ」を初開催し、13 大学が出場するなど「書のまち」として着実に歩みを進めています。

こうした象徴的な大会に加え、本市において書道文化をより身近に広げる取組が「書道文化醸成事業」です。

本事業は、書道パフォーマンスの生みの親である福岡教育大学の服部一啓（かずたか）教授を令和4年度に招いて実施したことが始まりです。以来、書道パフォーマンス甲子園の縁でつながった多彩な講師陣の協力のもと、学校や公共施設、ショッピングモールなどでワークショップや講演会を重ねています。

特に服部教授は、これまでの経験を活かし、本市が日本一の紙のまちであることを紹介するとともに、地域産業や歴史、文化への理解を深めながら、「楽しく書く」体験を何より大切にしています。書道用具で美しく書く体験にとどまらず、大会で使用する縦4メートル×横6メートルの巨大な用紙に大筆で揮毫（きごう）したり、毛糸やスポンジ、たわしなど身近な素材を使って文字を書いたりするなど、自由な発想を活かした取組を展開しています。

デジタル化が進む今だからこそ、墨のかすれやにじみが生み出す手書き文字のぬくもりは新鮮で、参加者からは「書道は楽しい」という素直な声が寄せられています。

こうした取組を通じて、書道を地域に根ざした文化としてさらに育み、次世代へ確かに継承していくことを目ざしています。将来、書道パフォーマンス甲子園を目ざす生徒や書家を志す若者がこのまちから生まれることを期待し、日本一の紙のまちの誇りを未来へと力強くつないでいきます。

地球となかよし ゼミナール

【連載第２回】（全３回）

10代の読者に向けた本づくり
～岩波ジュニア新書の取組～

岩波書店ジュニア新書
ジュニアスタートブックス編集長　須藤　建

前回は岩波ジュニア新書というシリーズについて、また編集部が設けているモニター読書制、出張読書会という取組についてご紹介しました。今回はその中の出張読書会についてより詳しくご説明したいと思います。

学校現場の状況を鑑みたスケジュール感で実行

出張読書会は２０２３年から始めた活動で、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県など近県の中学・高等学校（フリースクールなども含む）の生徒を対象に行っています。「編集室通信」という編集部発行の小冊子や、岩波書店のホームページで春から夏頃に募集をかけ、秋から冬にかけて編集者が学校を訪問します。つまり、一学期中に募集をかけ、二学期に読書会を行うというのんびりしたペースで、だいたい中間テストや期末テストが終わった頃に各学校へお邪魔しています。募集期間を長めにとっているのは、せっかく学校図書館司書のかたや国語教員のかたがこの活動に興味をもってくださっても、学校によっては活動に対し承認が降りるまでに時間がかかる場合があるためです。テーマ書目はジュニア新書かジュニアスタートブックス（中学生のための学習入門シリーズ）であれば自由、10人程度の少人数制で、時間は60分～最大90分程度です。

対話型の読書会で得られる気づき

読書会において最も大切にしているのは、一方的にお話しする講演のようにならないこと。生徒の皆さんと双方向の対話が生まれるようにと心がけています。ある学校では、体と心の関わりについて解説した本から、障がいやセクシャリティ、公共性について話が広がりました。生徒の皆さんの関心が高い進路や就職に関する本を読んだ時は、それぞれの経験談や、専門学校に進むか大学に行くかといった悩みが飛び出しました。ボードゲームづくりの本をテーマに選んだ時は、つくってみたいゲームのアイデアを生徒の皆さんに発表していただきました。

ある学校で日本の近代文学を紹介する本の内容から、「推し作家」のトークになった時に、受験勉強が大変で時間がなかったことや、本だけは娯楽として許されていたという生徒のかたが複数人いて、興味深かったです。「自分の時間を生きていますか？」という帯の言葉が気になって『モモ（作：ミヒャエル・エンデ）』を手に取ったという生徒もいました。普段からとてもお忙しい毎日を過ごされていることがわかります。そんな中で本を手に取ってもらうのは大変なことです。

読書会ではフォントの読みやすさや、装丁についての意見を直接聞くこともありますし、逆に生徒の皆さんから編集の仕事の具体的なプロセスや、企画の意図について鋭い質問が飛ぶこともあります。その内容は「読書会の報告」としてチャットツールで社内共有されているので、新刊のアイデアを錬る際の糧にもなります。一人で原稿に向き合っているだけでは気づけない視点をもらえることは、この活動の大きな醍醐味です。

何より、中学生や高校生の興味・関心がさまざまである中、具体的な一人一人の顔を頭に思い浮かべながら本づくりを行うことは、非常に大切なことであると感じています。

情報過多な時代、新書の役割とは？

読書会は新書を知ってもらうための活動でもありますが、一方で気になっているのは、情報を得るためには多種多様な手段がある現代において、「新書」はどういう立ち位置で、どのような役割を担えばいいのか、ということです。次回はその辺りについてお話しします。

読書会で読まれ、会話が深まった２冊。左から『ボードゲームづくり入門』と『ことばで愛し、ことばでたたかう　日本文学の宝石箱』。

須藤建（Takeru Sudo）
１９７９年神奈川県生まれ。大学卒業後、台湾留学、高校での教員補助などを経て、２００５年岩波書店入社。電子出版編集部、児童書編集部、単行本編集部を経て、ジュニア新書編集部へ。２０１３年1月に10代向けの海外文学シリーズ「STAMP BOOKS」を創刊。２０２４年10月から岩波ジュニア新書、岩波ジュニアスタートブックス編集長。

Front Runner

【連載第３回】（全３回）

『現代アートのすゝめ』

撮影：新津保建秀

森美術館 館長
片岡　真実

現代アートは、政治、社会、数学など多様な観点から世界の構造を理解する、極めて刺激的な入り口だ、という言葉で前号を締めくくった。現代アートは確かに世界の「多様性」を学ぶ入り口だが、一方では、それでもなお共通するものは何かという「普遍性」を学ぶ教室でもある。

2019 年に森美術館で開催した「塩田千春：魂がふるえる」展はその好例となった。塩田千春は赤や黒の糸を空間にダイナミックに張りめぐらせるインスタレーションで、いまや国際的に知られている。彼女の関心事は極めて私的な体験から生まれるものでありながら、それらを生命、生と死、存在といった普遍的な問いを本質まで掘り下げることによって、「私」が「私たち」となっていくのだ。

塩田は 1972 年に大阪府吹田市で生まれ、伝統的な家父長制のなかで家業を継ぐ責任なく育てられた。そのため、女性という存在に向けられた不条理な価値観とそれに対する抵抗感を抱きつつ、自身の生き方における選択や存在の意味を思考することとなった。12 歳でアーティストになることを意識。1992 年には京都精華大学美術学部（現芸術学部）に入学。在学中のオーストラリア留学時にパフォーマンスやインスタレーションといった表現の素地ができた。1996 年には渡独し、ハンブルク美術大学でパフォーマンス・アートの先駆者マリーナ・アブラモヴィッチ［1946 ～］に師事。自己の意識や存在を極限まで追求する実践に出合った。1997 年にベルリンに移住し、現在も同地を拠点にしている。

日本デビューは 2001 年の「第 1 回横浜トリエンナーレ」だ。泥で汚れた長さ 14 メートルのドレス５着によるインスタレーション《皮膚からの記憶》を発表し、アーティスト塩田千春の存在を知らしめた。その後、着実に力をつけ、2015 年にはベネチア・ビエンナーレの日本館代表となった。私自身は、その翌年の 2016 年に彼女がベルリンで展示した《不確かな旅》を見て、大規模な個展開催の準備ができたと感じた。ベネチアでの古い２隻の舟は、《不確かな旅》では鉄筋だけでできた６隻の抽象的な舟に変わっていた。場所固有のものではなく、誰の人生にとっても不確かな未来を示唆する、普遍的なものに作品が昇華したと感じた。

2017 年に森美術館での個展をオファーした。その翌日、塩田は 12 年前に罹患した卵巣癌の再発を医師に告げられた。手術と治療を経ながら展覧会構成と新作を考える濃密な時間を彼女は過ごした。塩田が若い頃から関心をもっていた生と死、存在の問題は、人生の旅路を続けるに従って実際の経験と重なり、そのことが作品に強度を与えつつあった。

「塩田千春:魂がふるえる」展は、森美術館の後、釜山、台北、上海、ブリスベン（オーストラリア）、ジャカルタ、深圳の美術館に巡回した後、パリのグラン・パレ、そしてトリノ東洋美術館に巡回した。いずれの会場でも予想の倍以上の入場者数を記録した。グラン・パレでは 10 万人予想のところ 30 万人を超えた。私自身、極めて私的な感情や記憶を起点にする塩田千春のアートが、明らかに多様な言語や文化、歴史を超越して、同じ人間の魂を揺さぶることを見てきた。塩田の言う“「私」が「私たち」となっていくこと”は、他者の存在、生命の重さを想像することでもある。

これほどまでに世界が混迷する今日、現代アートを通して、未来を担う子どもたちにそうした想像力が育まれることを願うものである。

●塩田千春《不確かな旅》2016/2024 撮影：筆者

Educo No.70 2026年4月27日発行

森羅万象の“つながり”を漫画で描く

ほ・っ・と・な・出・会・い

絵描き・漫画家 石井 明日香（いしい あすか）さん

目には見えないけれど、大切なもの

『ひさかたのおと』は私の初連載作品です。舞台は小笠原の架空の島・青島。そこでは神秘的な現象が起こるのが日常で、島の人々もそれらをごく自然に受け入れています。しかし、新任教師としてこの島にやってきた柚木巽は「説明できないことは起こるはずがない」と、目の前で起こる不思議な現象を見て見ぬふりをします。おそらく、多くの人が巽と同じように「こんなことはあるはずがない」「気のせいだ」と自分の感覚にふたをしてしまうのではないでしょうか？　けれども、古来、私たちの祖先は森羅万象に〝人知を超えたものの存在〟を感じ、それらを「八百万の神」と呼んでいたのです。そのような〝五感を超えたところで感じる気配〟や自然と人との関わりを表現したいと描き始めました。

わかりやすい敵が出てくるような話ではないのですが、「この島の暮らしに憧れる」「なぜか懐かしい感じがする」というお言葉をたくさんいただき、また、自身の不思議な体験談を打ち明けてくださるかたもいて、〝目には見えないけれど大切なもの〟を読者の皆様と共有できた気がして、本当にうれしかったですね。

『ひさかたのおと』１巻（講談社）

誰もが孤独で、でも独りじゃない

青島で起こる不思議なできごとは、私が3年間を過ごした沖縄の風習や、旅先で出会った文化や自然から得た着想が色濃く反映されています。例えば〝結（むすび）〟と呼ばれる動物の姿をした存在が出てきますが、これは、カナダ滞在時に知った北米先住民の氏族制度（クラン）からインスピレーションを得ています。彼らは自分たちの祖先をオオカミやシャチ、ワタリガラスなど身近な動物の化身であると信じていて、トーテムポールに一族を象徴する動物を彫り、霊的なお守りとしていたのです。

〝結〟は生命の大きな流れとつながっている存在で、青島の島民には一人一人に自分と対となる〝結〟がいます。今の社会に生きる人々は、人間を個々に独立した存在と考えがちで、現代は特に孤独を感じやすい時代だと思います。しかし、私たち人間も生命の大きな流れとつながって生きているという実感があれば、孤独を感じたときも「独りじゃない」と強くいられるのではないかと考えたのです。

温かな目に見守られた学生時代

物心ついた頃から絵を描くことが大好きで、暇さえあれば描いている子どもでした。多摩美術大学で学び、その後は沖縄県立芸術大学の大学院に進学しました。「海の近くで絵を描きたい」というわがままを、何も言わずに受け入れてくれた両親には感謝しかありません。両親は二人とも教師ですが「勉強しなさい」と言われたこともなかったですね。中学生の頃に友だちに「絵ばっかり描いていて、怒られない？」と言われて初めて「絵を描くって、怒られることなんだ？」と驚いたほどです。私は数学が苦手だったのですが、担任の先生もできないことを咎めるよりも、得意なことや、興味のあることを伸ばそうとしてくれていたように思います。歴史を4コマ漫画で描いたり、歴史新聞を作ったりするなど、ユニークな宿題を出すこともあり、ご自身の担当教科である日本史が大好きであることがこちらにも伝わってくる。そんな先生でした。

沖縄芸大を修了した後、私も伊江島という離島の中学校で美術の先生をしていた時期があったのですが、その学校の先生がたも、子どもたちの特性に合わせて違う課題や役割を与えるなど〝個々のもつ力を活かす教育〟をしておられる印象でした。

「なぜか気になる」は大事なサイン

現在、連載中の『火の龍の国』は、自らの中に龍を宿し、龍に惹かれる少女・シャンリィの物語ですが、彼女には自分自身を投影しているところがあります。恐ろしい龍を宿すシャンリィは、そのために苦難も味わいますが、一方でそれは強みでもあるのです。どうしても惹かれて、やり続けても苦ではないものを一つもっていること。それはどこかで自分自身を支えてくれると思います。

長い間、「絵は描けるけど、それをどう活かせばいいのか」悩み続けてきましたが、漫画表現に出会って、一つ道がひらけた気がしています。子どもたちには、もし「なぜかわからないけれど、気になるもの」があれば、それを見過ごさないでほしいと思います。それは自分にとってかけがえのない〝何か〟の種かもしれません。

石井明日香（Asuka Ishii）
絵描き・漫画家。三重県熊野生まれ、東京育ち。旅や自然からインスピレーションを得て描く、幻想的で詩的な作品が特徴。代表作『ひさかたのおと』（全2巻）はフランス、韓国、スペインで、最新作『火の龍の国』（白泉社）もフランスと韓国で翻訳出版されるなど、漫画作品が海外から高く評価されている。紙や布、流木などさまざまな素材に描く作品など、絵画の展示活動も意欲的に行う。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆「自然に浸り、他人が与えてくれる安易な正解に飛びつかず、時間がかかっても自分の頭で考えることが、これからの時代を粘り強く生き抜くことにつながる」養老孟司先生の巻頭インタビューは、まさにスマホ時代への警告とも思えるメッセージでした。
◆教員数不足や問題行動の多様化、教員の働き方改革の必要性が叫ばれている中、前明石市立貴埼小学校 校長 中野裕香子先生の「チーム担任制」には大賛成です。
◆「ほっとな出会い」の鈴木香里武さん。すばらしい担任の先生との出会いがあって、クラスの中に居場所ができ、自らの進む道筋を見つけることができて本当によかったと思います。
◆山梨県小菅村が運営している「すたすたスクール」はすばらしいですね。巻頭インタビューの養老先生の考えが生かされればと願っています。

学びのチカラで　人と社会を　未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。
これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。 学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。 そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

発行所　教育出版株式会社　発行者　別府直之
〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館
内容について　Tel.03-5579-6554　Fax.03-5579-6574
配送について　Tel.03-5579-6546　Fax.03-5579-6548